

# アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

— 国と言語，言葉とコミュニケーション —

今 西 薫

## I

現在アイルランドの人口はおよそ450万人(北アイルランドを含むと620万人)であるが、その中でアイルランド語を第一言語として話している人の数はおよそ5万人、アイルランド語と英語をとともに日常的に話しているのは10万人程度と見積もられている。アイルランド共和国憲法によってアイルランド語が第一公用語であると定められているにもかかわらず、大多数の人々は、隣国のイギリスの母国語である英語をあたかもアイルランドの母国語のように使用しているのが現状である。こうした状況に対して、自国の言語であるアイルランド語を取り戻そうという動きが一部の人々の中で現在でも展開されている。この運動は、1893年に設立されたアイルランド語の復権を目的としたゲーリック・リーグから連綿として続いているものである。政府も初等教育課程において8年間<sup>(1)</sup>、中等教育課程において5年間<sup>(2)</sup>、合計で13年間必須科目としてアイルランド語の教育を行い、母国語の普及に努めている。

しかし、幸か不幸かは意見の分かれるところではあるが、英語に代わってアイルランド語がアイルランドの主要な共通語になる可能性は、現在の状況からしてほとんど皆無に近い状態である。国民の大多数は世界語としての英語の有用性を認め、アイルランドの主要言語である英語が、イギリスやアメリカのみならず世界との結びつきにおいても、自国にとって有利

であると考えている。

こうしたこともあって、必須化されたアイルランド語の教育に対する生徒たちの反応は冷ややかである。強制的に教えられる教科によく見受けられることだが、アイルランド語はもはやアイルランドの多くの生徒にできれば忌避したい言語となっている。

政府の動きにアイルランド語のテレビ放送の TG4, Cula4, ラジオ放送の RTE, Radio na Gaeltachta, Radio na Life, Radio Ri-Ra, Anocht FM が連動して、アイルランド語を普及させようとしているが、期待されたほどの成果は収めていない。アイルランド語の使用範囲が英語の通用圏と比較してはるかに狭いために、若者には自分たちの本来の言語というより、役立たない「外国語」、あるいはラテン語のような「死語」の学習を課されているという意識がぬぐいきれない。

ジョージ・スタイナーは現在世界で使われている言語は四千か五千だと<sup>(3)</sup>している。それぞれの民族の話す言語とはその民族の歴史と不可分のものであり、言語の歴史とは領土争奪の戦いと文化の葛藤の物語である。アイルランドの人びとは、いまもって自国語を奪われたにも等しい状況下にある。侵略者によって強制された過去は過去として、現在、独立国であるアイルランドは自国の母国語を取り戻してもいい立場にあるのに、過去の状況から実質上ほとんど「改善」されてはいない。デクラン・カイバードが「アイルランド語の衰退はアイルランド人がそれを許したときにこそ起こった」と指摘する<sup>(4)</sup>ように、現状がこうあるのはアイルランドの多数派の人々の思いの結果であることは否定しきれない。英国という他国の文化、英語という他国の言語に「侵略」された国民が、いまこうして現状に満足するに至ったそもそもの原因を探るにあたって、アイルランドの歴史上の出来事、そして現代のアイルランドを代表する劇作家ブライアン・フリールの作品『トランスレーションズ』を足がかりにしてみる。

言葉というのは常に変遷過程の途上にあって、日々、私たちが気づかない程度に徐々に変化している。新語が作られ、目新しい外国語が入り込み、

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

同じ言葉でも微妙に意味する内容のニュアンスが変化したり、同じ言葉が皮肉に用いられて逆の意味になることもある。ひとつの言語内でもこうしたことが起こるのに、他国の言語を無理強いされた場合に、社会の混乱はいかなるものであろうか。アイルランドの歴史を概括する中で、『トランスレーションズ』に焦点をあてて、国と言語、言葉と人のコミュニケーションについて考察したいと思う。

『トランスレーションズ』は、フリールが言語の問題に正面から切り込んで書き上げ、自ら劇団まで組織して1980年にデリーの市庁舎<sup>(5)</sup>で上演したものである。『トランスレーションズ』の内容を分析する前に、フリールが自ら体験した1969年から1980年代までの北アイルランドが置かれた政治、社会状況の背景をまず見てみる。

そもそも、英愛(Anglo-Irish)条約により1920年にアイルランド南部の26州と北部の6州が分かれ、翌年に北アイルランドは一方的に独立を宣言し、1922年には南部はイギリス国王を元首と認めつつも、独立の一步として「アイルランド自由国」を成立させた。北部では入植したプロテスタントの人々の数がカトリックの人々と比較して9対7の比率で多く、プロテスタントの人々は選挙区を自派に有利なように区分けし、彼らの支配が続いていた。この時期には、造船業や公務員の就職差別、公営住宅への入居差別や、その他さまざまな市民権に関わる事柄で差別が公然と行われ、それに抗議するカトリックの人々の市民権運動はイアン・ペイズリーに代表される右翼のユニオニストや準民兵組織に暴力的に叩き潰されていた。南北統一がいっこうに進展しない状況にいらだった過激派勢力がイギリスによる支配の象徴であったダブリンのネルソン提督記念碑を爆破するという事件が起こった。

世界ではキング牧師による公民権運動やベトナム戦争、プラハの民主化運動、中国の文化大革命、パリやベルリンをはじめ多くの都市で学生が平和のために集会を開き、デモをし、機動隊と衝突している時代であった。これに触発されて、デリーやベルファストのカトリックの人々の住む地域

でもバリケードを構築して自衛を図るようになった。しかし、ロイヤリストからなる警察組織がバリケードを突破して戦闘を仕掛けてきたので、この地域での紛争は激化し、ついに1969年にイギリス軍が介入する運びとなった。これにより両派の武装闘争は押さえ込まれ、平和維持が図られると人々は期待していたが、イギリス軍は一方的にプロテスタントに肩入れしたために、カトリックの暫定派IRAはイギリス本土にまで爆弾を仕掛けるようになった。1981年にはボビー・サンズに代表されるIRAの服役者が罪人と同様に扱われることに抵抗し、囚人服を着ることを拒み、毛布に包まり、ハンガー・ストライキに入った。しかし、サッチャー首相の強硬姿勢は変わらず、次々と死者が出て、その度ごとに大々的なデモが行われた。

1980年の9月に『トランスレーションズ』が上演されたときのデリーをはじめ北アイルランドの主要都市はプロテスタントとカトリックの諍いの緊迫度が異常なまでに高まった時期である。『トランスレーションズ』の内容は150年も前のことであるにもかかわらず、実際にIRAとイギリス軍との戦いが行われているデリーでは、明らかに過去の事柄ではなかった。現在は、幸いなことに1997年にベルファスト合意が結ばれ、その後アイルランド共和国が国民投票により北アイルランド6州の領有権を放棄したために、一応の問題解決は図られている。

## II

アイルランドに対するイギリスの圧政の歴史とアイルランドにおける英語の浸透とは不可分の関係がある。イギリスのアイルランドの侵攻のはじまりは、1166年にレンスター地方の王ダーモットがヘンリー2世に軍事支援を要請したときに始まる。<sup>(6)</sup> チューダー王朝の時期に入ると、ヘンリー8世は、スペインに対抗するためアイルランド支配を企て、自らを「アイルランド王」と称した。娘のエリザベス1世はさまざまな政策でアイルラン

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

ドを搾取し続けた。エリザベス1世の後継者となったスコットランドのジェームズ1世はアルスター地方において、アイルランドの有力貴族に王への忠誠を求めた。しかし、ローマ法王からはジェームズ1世に忠誠を誓うなら破門し、死罪であると彼らに通告がきた。板ばさみにあった有力貴族のほとんどすべては、アイルランドを去りローマに逃れた。イギリス政府は、この機に肥沃な土地を没収し、プロテスタントの人々を入植させ、この地域を本格的に「英国化」させようとした。このようにして、1609年に20世紀後半の北アイルランド問題の根本原因が生まれた。

17世紀半ばになると、オリバー・クロムウェルがアイルランドのカトリック教徒の地主の土地をほぼすべて没収し、プロテスタントの入植者に分け与えた。1690年にはオレンジ公ウイリアムがジェームズ2世を破り、イギリスにプロテスタントの王位が確定した。1695年にはカトリック刑罰法<sup>(7)</sup>が制定され、政治的にも、宗教的にもイギリスのアイルランド支配体制が確立された。この時期から英語を話すアセンダンシーと呼ばれるプロテスタントの地主階級、アイルランド語を話すアイルランド人の小作農階級という支配者と被支配者の構図が出来上がった。

18世紀に入ると、カトリック教徒の人々はわずかに残っていた土地もほとんどすべて没収され、公民権は剥奪され、カトリックは違法扱いになった。1791年にウルフ・トーンによって、制限されていた信教の自由とイギリス支配からの独立を掲げて反乱の狼煙があがったが、イギリス軍により鎮圧された。1801年には、「グレートブリテンおよびアイルランド連合王国」の成立により、アイルランドはイギリスに併合され、自主性を失うこととなった。1829年にカトリック解放令が発布されるまでこの同じ状態であった。

19世紀に入って、アイルランドの人口は急増し、1940年代には800万人を超えるようになっていた。与えられていたわずかな耕作地はさらに分割され、人々はジャガイモの収穫のみに頼るという最低レベルの生活を余儀なくされた。また、経済的な危機だけではなく、社会的な危機としてはア

アイルランド語の使用が公的な場で制限されたこともあり、実社会である程度の地位に就こうとするなら英語を習得することが必須の条件となった。これもアイルランド語がアイルランドから消え去った原因のひとつであるが、「英語の支配」が進んだのは、1831年に始められた「国民学校」と呼ばれる初等教育制度によるものである。

それまで、教育は官憲に隠れるようなかたちで、生垣の陰でなされたこともあり「生垣学校」(hedge school)と呼ばれた。教育がイギリス政府により禁じられていたために、権力に隠れて生垣の陰で教育がなされたことに由来する名称である。初期の「生垣学校」は戸外で行われていたが、法律がのちに緩和されたために、徐々に屋内に教育の場が移っていった。こうした中で、イギリス本国よりも早くアイルランドで初等教育制度が導入された。教員の質も高く、授業料は無料であり、教育はすべて英語でなされるという实用重視の教育であった。

この国民学校制度はアイルランドの言語地図を大きく塗り替えることとなった。英語によって教育がなされたために、英語をコミュニケーションの媒体として駆使できる人の数は年を重ねるごとに増加していき、仕事を求めてイギリスやアメリカに行く人々にも英語学習の大きな動機づけとなっていた。そうしたところに、ジャガイモが1846年から4年間にわたって壊滅状態になったために大飢饉がおこった。100万人が餓死するか伝染病で生命を奪われ、100万人が海外に移住せざるをえなくなった。移住先はほとんどアメリカやイギリスなどの英語圏であったために、英語が話せるのと話せないのでは、就職の機会、職種、給与などに大きな差が生じた。このことが直接的な契機となり、アイルランドの人々に英語の重要性を認識させることとなり、大飢饉以後はアイルランド語の衰退に拍車がかかった。ちなみに、1851年の国勢調査では、150万人、即ち全人口の23%の人々がアイルランド語を第一言語として話していたが、半世紀後の1900年になると、これがわずか5%にまで落ち込むこととなった。

1829年のカトリック教徒の解放により、カトリックの弁護士ダニエル・

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

オコネル(1775-1847)が指導的な地位に就いた。オコネルは「古い言語〔アイルランド語〕は現代化を促進するのに障害である<sup>(8)</sup>」として、英語を駆使できればアイルランド人は解放されると信じた。これに対し、国の伝統を重んじる人々はアイルランドの文化が失われることに危惧を抱き、英語の導入に積極的なオコネルには常に懐疑的であった。

1891年のスチュアート・パーネルの死後、議会闘争によって自治を勝ちとることが困難になり、知識階級の多くの人々が文芸活動によってアイルランドの文化や芸術を復権しようという動きが生まれた。その中で、文学者で言語学者でもあったダグラス・ハイドは、イー・マクニールが創設したゲーリック・リーグの初代会長となり、「イギリス人になるのをやめよう。考えうるあらゆる点でアイルランド人になろう<sup>(9)</sup>」と呼びかけた。イギリス政府による国民学校の導入は、アイルランド固有の言語を略奪する帝国主義的行為であったとして、彼はアイルランド語の復権を唱えた。さらには、ゲーリック・フットボールやハーリングなどのアイルランド独自のスポーツを奨励した。ハイドは、ある特定の社会がその固有の言語を失うことは、その社会の文化とアイデンティティを喪失することであると考えた。言語は民族の文化的なアイデンティティの本源的なものであり、それは固守されるべきだと彼は確信していた。しかし、ハイドのこの思いとは逆に、英語はアイルランド風に同化しつつ、アイルランドにますます浸透していくこととなった。

### III

アイルランド人の話す英語は、ハイバノ・イングリッシュ(アイルランド人英語)と呼ばれていて、それはイギリス英語がアイルランド語の発音やイントネーションの影響を受けたり、語彙や文法形態が多少異なる英語になったものである。これは、『トランスレーションズ』やJ.M. シングの作中人物が話す独特の英語表現でもある。ハイバノ・イングリッシュとイギ

リス英語との文法形態の違いの簡単な例を挙げ、すこし比較してみることにする(括弧内はイギリス英語)。

名詞中心の表現として、

He's been on the batter since this morning. (He's been out and about since this morning.) 「あの男は今朝から馬鹿騒ぎをしている。」

Put some order on things. (Tidy things up.) 「片付けなさい。」

主格の関係詞の省略として、

with a man killed his father (with a man who killed his father) 「父親を殺した男と一緒に」

a man is going to make a marriage (a man who is going to marry) 「結婚する男」

現在分詞による現在の習慣の表現として、

Is it often the polis do be coming into this place? (Do the police often come to this place?) 「警官はここにはよく来るのかい。」

現在分詞の特殊な用法として、

And me taking it all down (while I was writing it) 「私が書いていたあいだに」

I'm after doing it. (I have just done it.) 「それをやり終えたところだ。」

You're after making a mighty man of me this day. (You've made me strong today.) 「今日あなたのおかげで私は逞しくなった。」

過去分詞の過去の用法として、

Is it a man you seen? (Is it a man you saw?) 「あなたが見たのは男の人だったの。」



アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

強調構文ではなく、通常の表現として It is .....から文を始めて、

It's Irish he uses when he's traveling around scrounging votes. (He uses Irish when he travels around looking for votes.) 「票集めにまわるときには奴はアイルランド語を使うんだ。」

等位接続詞の and を従属接続詞として用い、その導く節の動詞を省略して、

May I meet him with one tooth and it aching? (May I meet him with one tooth while it is aching?) 「歯が痛いときにあの人に会うなんてことができますか。」

And I walking forward facing hog, dog or divil (While I was walking forward facing hog, dog or devil) 「歩いているときに、ブタとか犬とか悪魔に会ったなら」

強い意味の命令文として Let を用いて、

Let you not be tempting me. (Don't tempt me.) 「そそのかさないで。」

Let you tell me your story. (Tell me your story.) 「あなたの話を言ってごらん。」

倒置の用法として、

Isn't it long the nights are now? (Aren't they the long nights now?) 「いまは夜は長くありませんか。」

It's making game of me you were. (You were making game of me.) 「私をかかっていたのね。」

イギリス英語にはない前置詞の特殊な用法として、

He's at the salmon. (He's fishing salmon.) 「奴は鮭を釣ってるんだ。」

They're probably at the turf. (They're probably cutting peat.) 「奴らは泥炭

を取ってるんだ。」

強調としての再帰代名詞の用法として、

And how's the old man himself? (How are you, Father?) 「お父さん、調子はどう？」

Sure you know I have only Irish like yourself. (You should know very well that I speak only Irish like you.) 「わかってるだろう、お前と同じで話すのはアイルランド語だけだ。」

アイルランド語からの隠喩、直喩、イディオム、格言として、

That's the height of my Latin. (That's as much Latin as I know.)

「僕が知っているラテン語はそれぐらいのものだ。」

the divil a one (no one at all) 「誰もいない」

言葉の転訛として

riz (raised) 「育てられた」、darlint (darling) 「人気者」、hurted (hurt) 「傷ついた」

イギリスとは少々異なる英語であっても、アイルランドのほとんどすべての地域では英語が主要言語になってしまったが、ゲールタハト (Gaeltacht) と呼ばれるアイルランド語が公用語とされている場所がある。<sup>(10)</sup> アイルランドの西部地区、アルスター地域ではドニゴール州の一部、コナハト地域ではメイヨー州の西端、ゴールウェイ州、アラン諸島。さらには、マンスター地域ではケリー州のディングル半島地区、西マスケリー地区などである。

2006年の調査では、アイルランド全人口424万人のうち、2.1%の9万2千人がゲールタハト地区に住んでいる。この地区は、交通の便が悪くどちらかという文明から取り残されたような場所である。北アイルランド

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

では、議会が1990年代まで公立学校でのアイルランド語の禁止、公の看板などのアイルランド語での表示を禁止していた。これに対し、シンフェイン党の党首であるジェリー・アダムズはアイルランド語を取り戻すためには、辺境の地にしか残っていないゲールタハト地区を都会にも作るべきだと考えた。彼は、2005年にベルファストの西にゲールタハト地区を作り、イギリスによる地勢調査の際につけられた英語読みの地名を抹消してしまった。このため、この地区内では道路標識はすべてアイルランド語表記だけになっている。また、2007年にはアイルランド語はEUの公用語として認められるようになった。

さらに、ゲールタハト地区外でもアイルランド語を使って教育のすべてを行う組織ゲールスクールアナ・テオランタ(Gaelscoileanna Teoranta)があり、1975年から文部科学省の支援を得て、積極的な活動をアイルランド全土で展開している。ちなみに、この組織ができる以前の1971年には、アイルランド語を使っての初等教育機関はわずかに11校、中等教育機関では5校だけであったのに、2007年には全国に139の小学校、38の中学校の数となっている。これに、ゲールタハト地区の教育機関を加えると、現在アイルランド語で授業を行っている学校数は、初等教育機関で298校、中等教育機関で84校と、それぞれ初等教育、中等教育で一割を占めるほどになってきている<sup>(11)</sup>。このアイルランド語漬けの教育施設がアイルランド全土に広がれば、アイルランド語復権の日が来るかもしれないが、これには「実用的な」英語を捨てる覚悟があるのでそう簡単に解決できるものではない。

#### IV

文化的な側面のひとつである演劇という観点からイギリスとアイルランドの関係を見てみることにしよう。アイルランドには、そもそも演劇の伝統などはなかったにもかかわらず、アイルランド生まれやアイルランド育ちの人々の中からイギリスの劇壇で活躍する劇作家が数多く生まれている。

ウィリアム・コングリーヴ、ジョージ・ファーカー、オリバー・ゴルドスミス、リチャード・シェリダン、ダイアン・ブシコー、バーナード・ショー、オスカー・ワイルドなどである。

しかし、こうした人々の活躍は、あくまでもイギリスの劇壇でのことであり、ダブリンがイギリスの主要都市となるまでアイルランドで演劇が上演されたことはほとんどなかった。アイルランドの伝統は、吟遊詩人に見られるように、詩であり、語りであり、唄であった。本格的にアイルランドに独自の演劇文化が形成されたのは、19世紀末のイエイツやグレゴリー夫人によるアイルランド文芸復興の運動によるものである。

本稿で扱う『トランスレーションズ』が書かれた頃の社会状況の悪化の発端となったのは「血の日曜日事件」である。1972年1月30日、アイルランドのデリー市での平和的なデモ行進に対して、イギリスの空挺部隊による無差別発砲によって13人の犠牲者が出た事件である。北アイルランドは自治権を失い、ここから30年にわたるプロテスタントとカトリックの人々の抗争が起り、少なくとも3,600人の命が犠牲になっている。毎年、「血の日曜日事件」の犠牲者を追悼する行進がいまでも行われているが、フリールもイギリス政府に対する告発である『都市の自由』(*Freedom of the City*, 1973)を書いた。『やってきたよ、フィラデルフィア』(*Philadelphia, Here I Come*, 1964)はフリールが世に認められた最初の作品であるが、『都市の自由』はフリールの作品に政治色が入ってきた最初の作品である。

『トランスレーションズ』の上演は、この「血の日曜日事件」の歴史的な事件現場で行われた。劇場空間の選定にもフリールの政治的な意図を読みとることができる。また、内容的に『トランスレーションズ』と対になっている喜劇『コミュニケーション・コード』(*Communication Cord*, 1982)では、郷愁を抱かせるアイルランドの田舎の景観やカントリー・ハウスを礼賛する人々が揶揄されている。『トランスレーションズ』の背景には、イギリス政府により派遣された木工兵によるアイルランドの地勢調査と地名の英語表記の問題、そして1831年から始められた帝国主義的な国民学校

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』の設立がある。アイルランド国内の緊張関係は、時代は変わっていてもデリー(ロンドンデリー)<sup>(12)</sup>にも、北アイルランドの他の主要な都市にも依然として継続される形で残っていた。

この作品が書かれたのは北アイルランドが「ベトナム化」された激動の時代である。フリールは、俳優のステイブン・リーとともに北アイルランドでフィールド・デイ劇団を創設し、初演したのがこの『トランスレーションズ』である。この作品に関するメモに「政治作家」とレッテルを貼られることへの危惧が書かれているが、創作時の葛藤は、アイルランドが抱えるさまざまな問題の根本原因であるイギリスに対する告発と芸術性の維持とのかねあいであった。しかし、この作品でも明らかなように、フリールの劇作活動の背景にはイギリスの帝国主義に対する批判とアイルランドのナショナリズムが根底にある。

この作品は、劇作家フリールにとってもアイルランド演劇界にとっても画期的なものであった。フリールの親しい友人でもある劇作家トマス・キルロイがこの作品を「南北アイルランドの現代の政治に光を投げかける演劇」<sup>(13)</sup>と語ったように、フィールド・デイ劇団の政治的な意図は明らかである。

後にフィールド・デイ劇団のディレクターとして、ノーベル賞受賞作家のシェーマス・ヒーニーを始め、トム・ポーリン、ディビッド・ハモンド、シェーマス・ディーンなどの北アイルランド出身者が加わっている。彼らの共通の認識は、アイルランドの政治や社会問題を見直し、その解決を急務の課題とするというものである。フィールド・デイ劇団は、この問題を提示し、当時起っている諸問題の原因と兆候を探り、従来の典型化された考え方を打破することを主眼とした。

『トランスレーションズ』は、アイルランド北部にあるドニゴール地方のバリーベーク(アイルランド語で「ちっぽけな村」の意味)<sup>(14)</sup>での1833年の出来事を取り扱っている。話の筋はそこに住むオドネル一家を中心にして展開する。オドネル一家は、その「ちっぽけな村」でお粗末な掘っ立て小屋の

「生垣学校」を営んでいる。そこでは、伝統的なギリシア語、ラテン語のほかアイルランド語で基本科目が教えられているが、村のまわりでは、もう地域の名称が英語読みに変えられようとしている。さらに、「生垣学校」の廃止も進んでいて、それに取って代わる「国民学校」の導入の時期でもある。フリールはこの二つの歴史的な出来事を巧みに作品に取り入れて、1960～80年代の北アイルランドの状況を二重写しにして、イギリスに支配されたアイルランドを描くのである。

J. M. シングは、アイルランドの西部の人々の生活やその地方の人々の言葉を写し取り、それを作品に仕上げたが、外部からの観察者としての立場であった。これとは対照的に、フリールにとっては、バリーベークの人々の日常は彼自身が体験し、共有するもので、そこから作品が作りあげられている。ジョン・オドノバンが1824年から行ったドニゴールでの地勢調査に関する手紙を資料として、フリールは作品を仕上げたことを『ドニゴールにおける地勢調査の手紙』<sup>(15)</sup>の序文で語っている。

『トランスレーションズ』では、イギリスの木工兵が地図作成のために、バリーベークの村近くにキャンプを張って地勢調査を行なっている。この地図作成の過程で、地名はアイルランド語表記から英語表記にされ、地名の元来の意味が失われたり、地名の発音が元来のものとは少し異なるような英語名がつけられることになる。ダブリンなら、Dubh Linn (black pool 「黒い水がよどんだ場所」)がDublinとされ古来の意味を奪われてしまう。ドニゴールという地域名Donegalは、アイルランド語でDhu'n Na Nga'lであり、「外国人の砦／定住地」の意味である。この「ドニゴール」というアイルランド語では、この地域にやってきた外国人は木工兵のランシー<sup>(16)</sup>やヨーランド<sup>(17)</sup>が最初ではないことがわかるのだが、英語表記にしてしまうと過去の歴史的な謂れなどは一切消滅してしまう。この作品では、Cnoc Banという地名は、音からならKnockban(ノック禁止?)、意味からはFair Hill(魅力的な丘)に、Bun na hAbhannの場合は、音からなら“Burnfoot”(足を焼く?)に、意味からは“Riverfoot”(河口)に変更可能であるという例が

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

示される。Lis na Muc(the Fort of the Pigs「ブタの砦」)は、Swinefort と意味から置き換えられることになる。このアイルランドの歴史や文化背景を無視した英語名による地図の作成や標識の英語表記化は、明らかにイギリスによるアイルランドの文化や歴史を抹消しようとする侵略行為の象徴になっている。

国民学校と生垣学校との対比においても、一方的に制度化された「国民学校」は、イギリスによるアイルランド人の母国語略奪行為であるというフリールの視座は揺るぎない。英語導入を全面的に受け入れることは、アイルランドにとって固有の文化喪失そのものであり、地名表記におけるアイルランド語から英語への変更は、言語を単なる記号に置き換えることだと、フリールは強調する。

『トランスレーションズ』の登場人物のモイラは、英語を習得したいと願っていて、英語がアイルランド語に取って代わることを歓迎している。英語に代わることによって視野が開け、世界に堂々と言葉のハンディなく雄飛できる可能性が生まれる。アメリカに移住するにあたり、英語圏以外の国からの移民が単純作業や過酷な肉体労働市場に自分を身売りせねばならないのに対して、英語を習得していればはるかに恵まれた職域での職探しができ、経済的な豊かさの確保に一役買えることは確実である。アイルランド全土が英語化されればアイルランド人はアメリカやイギリス、さらにオーストラリアなどにおいても、英語圏以外の外国人よりはるかに優位に立てるのである。モイラはアイルランドの伝統やしきたりなど、古いものに固執することなく、積極的に新しいものを取り入れ、自己開発を行うにあたって英語を習得することが先決であると考えている。

この作品にはトリックがあって、アイルランド語を話すはずの登場人物のアイルランド人も舞台で英語を話す<sup>(18)</sup>。アイルランド語を話す役者を使って、英語字幕でその意味を映し出すことは当然できるのだが、フリールは舞台上のアイルランド人にも「母国語として」英語をあえて使わせることによって、アイルランドが母国語を喪失してしまった現状を提示する。こ

これは19世紀前半に起こったアイルランドの「悲劇」を現代の視点から眺めなおそうとする仕掛けでもある。もちろん舞台では、アイルランド語を話すという設定の役者の英語は、前述したハイパノ・イングリッシュであり、アイルランド訛りの英語発音なので、英語を「母国語」とする観客(アイルランド人もこれに含まれるのは皮肉なことだが)には容易にアイルランド人とイギリス人を区別することができるように仕組まれている。

牛小屋を教室として「生垣学校」を経営するのは、オドネル家の家長でケルト文化を誇りにする大酒飲みのヒューである。若い頃には、1798年のウルフ・トーンのイギリス政府に対する反乱に触発されて武器を手に行っている(臆病風に吹かれて実際には闘いには出向いていないが)。彼は新しく導入される国民学校の校長の職に応募していて、楽観的にその地位に就けると思っている。実際は、酒癖の悪さが定評となっていて職に就ける望みは皆無に等しい。息子のメイナスも同じ職に就きたがっているが父親が応募しているので、自分は差し控えている。新しく導入される国民学校で職に就けば年俸56ポンドが保証され、モイラとの結婚も不可能ではなくなる。メイナスは子供のときに父親のヒューが酔っ払って起こした事故が原因で足に障害がある。バリーベークに住んでいてはメイナスは収入のめどが立たない。父親が生きている限りは状況が好転する可能性はない。アイルランドの父親と息子の伝統的な関係がここでもよく示されている。アイルランドでは、息子は父親の大きな権威に逆らうことができないのである。

メイナスの弟のオーウェンは首都のダブリンに6年間住んでいたが、故郷ドニゴールのバリーベークに木工兵とともに地勢調査の際の通訳として「トランスレーション」の仕事のために帰ってきている。オーウェンは、アイルランドの文化や社会に愛着があるため、地名を変えることには抵抗があるのだが、二つの異なる文化の橋渡し役になれるのではないかと楽観的に期待している。オーウェンが親しくなった木工隊の中佐ヨーランドは、父親が見つけてくれたボンベイの東インド会社に行くことになっていたのに船に乗りそこねて、父親にあわす顔がなく、お金もないのでしかたなく



アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

軍隊に入った男である。感受性が高く、バリーベグに到着してまもなく、美しいモイラと恋に落ちるのだが、モイラは英語が話せず、ヨーランドはアイルランド語が話せない。このふたりには相互のコミュニケーションは明らかにむずかしい。しかし、彼らにとって「愛」という別のコミュニケーションの媒体があり、その媒体によって意思疎通をはかるときには言語はいらず、当然のことながら、言葉を「翻訳」する必要はない。

ふたりの恋愛は、シェイクスピアの作品『ロミオとジュリエット』のように衝動的でもある。ヨーランドは無条件にアイルランドの風景、アイルランドの人々の生活ぶりが気に入り、モイラに魅せられて、周囲の状況が見えなくなっている。英語という実用的なコミュニケーションの媒体が与えてくれる可能性を、身をもって体現しているヨーランドは、モイラにとっては理想の存在である。モイラはヨーランドに、仕事が終わってイギリスに帰る際には自分を連れて帰ってと懇願する。ヨーランドは自分がアイルランド語が流暢に話せるようになったとしても、アイルランドでは「部外者」であると実感しているにもかかわらず、アイルランドに定住することを望む。モイラは、逆にイギリスに憧れている。

Yolland: I've made up my mind . . . I'm not going to leave here . . . .

.....

Maire: I want to live with you—anywhere—anywhere at all—always—<sup>(19)</sup>  
always. . . Take me way with you, George.

この相互に一方通行の会話は、皮肉にも、より大きなコンテキストの中における二つの国家間、二つの言語間におけるコミュニケーションの限界を暗示するものとなる。モイラとの結婚は絶望的であるメイナスは英語が話せるにもかかわらず、ヨーランドとは英語で話さない。メイナスは、ヨーランドたちが地図の作成という名目で軍事作戦を行っているのではないかと疑っている。メイナスは、言葉の不自由なセアラからヨーランドと

モイラがキスをしていたと知らされて、嫉妬に駆られて石を手に二人を探すが、探し当てても手に持った石でヨーランドを打ち倒すことができない。メイナスには孤島のミードン島で生垣学校を開いてほしいという要請があり、これを受ければ経済的にはモイラとの結婚も夢ではなくなるのだが、もうモイラにはヨーランドのことしか頭にない。しかし、モイラは徐々に自分の置かれた立場を感覚的に理解しだす。言葉は不自由でもメイナスの気持ちが読み取れるセアラは、イギリスのアイルランド支配に反感をいだく国粹主義者である双子のドネリーにも、モイラとヨーランドが恋仲であることを告げる(ようである)。ドネリーたちは、アイルランドの言葉、文化だけではなく、アイルランドの女をも奪いに来たイギリス兵を許すことはできない。彼らはヨーランドを殺害してしまう。

木工兵の隊長ランシーは、単純に自分たちのしている地勢調査と地名の変更はアイルランドの人々のためになると考えている。彼は任務として地勢の測量を行い、地図を作成していて、なんら悪意を持って調査をしているわけではない。言葉のコミュニケーション媒体としての広域性や共通性を重んじるランシーは、英語名の地図を作成することによって言葉の持つ意義を十分に活用できると考える実用主義者である。しかし、結果として、アイルランド古来の歴史を塗りつぶし、ただ自分たちには読みにくく、発音しにくいからといって、歴史的に意味ある土地の名前をイギリス人に都合のいいように変えてしまうのである。このことが植民地化を徹底するための手段となっているという認識がランシーには欠如している。

いよいよ、ランシーはヨーランドがアイルランド人に拉致されたもののだとして、24時間以内に発見されなければ家畜をすべて殺す、48時間以内に発見されなければ、この地区のアイルランド人の家を焼き払い、土地から追い出すと警告の通知を出す。メイナスは失意にくれて、ヨーランドの行方不明に関わる事件の首謀者して嫌疑をかけられることになろうとも、そんなことは意に介せず、バリーベグをあとにする。ヨーランドは依然として発見されず、殺された疑いが濃くなり、イギリス兵の報復が始まる。モ

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

イラはヨーランドがいなくなつて、途方にくれている。万が一見つからない場合には、ひとりでアメリカに移住して幼い兄弟姉妹に送金しなければならない境遇にある。そのときに備えて、ヒューに英語を教えてくれるようにと懇願する。モイラが「古い言葉は現代の進歩には障害となる」というアイルランドの政治家のダニエル・オコネルの言葉を引用して、英語の大切さを語る場面がある。モイラはアイルランドの伝統やしきたりなど、古いものに固執することなく、自己主張、自己開発などの積極性を大切に思っている。

ヨーランドとの会話で、ヒューはアイルランド語とアイルランド文学の質の高さに言及して、アイルランド人を「精神性豊かな国民である」と誇り高く述べ、アイルランド語がいかにアイルランドの人々の精神世界と密接に結びついているかを熱く語る。

アイルランド人を形作っているものは、文字通りの過去、歴史の事実ではなく、言葉に体现される過去のイメージである……私たちは、このイメージを更新することを決して滞おらせてはならない、さもなければ、私たちは時代遅れになる<sup>(22)</sup>。

この父親の抽象論に対して、息子のオーエンは、「…たったひとつ、変更不可能な『事実』がある。それは、もしもヨーランドが見つからなければ、みんなは家から追い立てをくらうということだ。ランシーがその指令を出した<sup>(23)</sup>」という現実論を語り、父親に警告する。

ランシーはイギリスの帝国主義体制をアイルランドにおいても確立しようとする支配層の手先にしか過ぎなく、アイルランドを理解しようなどという気は毛頭ない。ヨーランドの視座は、ふたつの葛藤する力にたいして何らかの折り合える接点を見つけ、相互理解の可能性を模索しようとするものである。ヨーランドには積極的に相手の文化を理解しようとする感受性の豊かさ、人としての温かみが感じられる。

中間的な立場にいるのはオーウェンである。彼自身の中に、二つの言語、二つの文化間の葛藤がある。『トランスレーションズ』における「翻訳行為」は言語的に複雑だけでなく、政治的にも困難な作業である。オーウェンに課された仕事は、彼には到底できない無理な仕事であることがわかる。危機的な状況になって、故郷で通訳でもあり翻訳作業の仲介者でもあったオーウェンも、いつまでも、アイルランドとイギリスとの中間の位置に自分の身を置くことは許されなくなる。自分の生まれ育ったアイルランド側につくか、自分の利益のために帝国主義的なイギリス側につくかの二者択一を迫られる。ヨーランドが拉致され、殺害されたかもしれないことに対する報復として、イギリス兵によって家畜は殺され、家は壊され、強制退去させられるのは目に見えている。オーウェンの抱いていた理想や夢は崩れ落ち、反抗の狼煙をあげてイギリス軍の駐屯地に火をつけたドネリー兄弟のいるアイルランド側につく以外に彼には道は残されていないに違いない。ドネリー兄弟の行為と同様に、オーウェンは自分の選ぶ道がイギリスに対する無力な抵抗であるとわかっているにもかかわらず、仮設の軍事施設を焼かれたことの復讐として必ず起こる故郷の町の焼き討ちを黙視することはできない。この施設が燃え盛る中、ヒューとジミーがローマに滅ぼされたフェニキア人の町カルタゴの滅亡を嘆き悲しむシーンでこの劇は終わる。

『トランスレーションズ』はすべての喜劇に、そして多くの悲劇に見られるように、コミュニケーションの欠如によって問題が生じる「誤解の劇」でもある。シェイクスピアの悲劇にしても、多くは誤解や妄想から生じるものである。リア王がコーデリアの沈黙を誤解して、自分を愛してはいないのだと解釈して起こる王国の崩壊とリア王自身の崩壊、オセロがデスデモナを誤解したために起こった殺害と自殺。コミュニケーションがうまく取れなかったために起こったジュリエットの墓地でのロミオの服毒自殺、そしてそれに続くジュリエットの自害。ヨーランドとモイラはナイーブにも心の赴くままに愛し、越えるべきでない政治的、民族的な境界を越えたことにより悲劇は起こった。《愛はすべてを解決する》という、

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』  
愛には国境はないという盲目的な理想主義による誤解である。ジミーはモ  
イラに話して聞かせる。

ジミー：ギリシア語にエンドガメインという言葉がある。同族婚とい  
う意味だ。エクソガメインの意味は部族外婚だ。そうそうこの境界  
は越えないものだ。双方がとても立腹するからな。<sup>(24)</sup>

フリールはこの作品のなかで地勢調査と軍の強制介入以上のものを状況  
の中に取り込んでいる。アイルランドの架空の町バリーベグにおける英  
語導入の際に起こる葛藤に、1980年頃の北アイルランドの困難な政治状況  
をも加味してフリールは観客に問題を投げかける。この作品は、イギリス  
とアイルランドとの問題だけではなく、小さな共同社会に生きる人々の  
「疎外」の劇でもある。愛は結ばれない。教育においては実用的な価値の  
みが強調される。イギリス人とアイルランド人とは結局は相容れないで、  
お互いの誤解は解けないままである。結末は悲観的である。

オーウェンの誤解は言葉が万能であると考えていた点にある。ランシー  
大尉の誤解は、少数の人々の罪のために、バリーベグの住民全員を罰し、  
人々の怒り、憎悪、抵抗がいかに激しいものになるのか、そして執拗なゲ  
リラ闘争を生み出すことになるのかを計りそこない、軍事を過信したとこ  
ろにある。このランシーに象徴される『トランスレーションズ』のもうひ  
とつのテーマは、暴力によってはアイルランド問題は解決しえないという  
点である。これは帝国主義のイギリス相手だけではなく、アイルランド内  
におけるIRAとUDRなどのカトリックとプロテスタントの武力衝突に  
関しても、フリールは問題を提起している。

## V

ジョージ・スタイナーが『バベルの後で』において「言葉とはメッセー

ジを伝えるための記号が恣意的に枠づけされ、習慣化された手段である<sup>(25)</sup>と記している。フリールの『トランスレーションズ』はこの『バベルの後で』に大きく影響を受けていて、スタイナーが定義づける「すべてのコミュニケーションは翻訳や解釈の行為であり、コミュニケーションすべては翻訳と解釈につきる。なぜなら、もともとの言語にあった豊かさは失われ、決して完全なものにはならないから<sup>(26)</sup>」という根本理念から作品が作られている。フリールは他国の言語のみならず同一言語においても必要とされる「翻訳」についても語っている。フリールは完璧な翻訳など絶対に不可能であり、同属の言語間であっても翻訳されれば、単なる近似のものになるにしかすぎないと考えている。

『トランスレーションズ』は、ある言語から他の言語への言葉の翻訳の問題点と文化を相互に理解することの難しさを描いている。「言葉」自体、発話者の心の翻訳であり、それがさらに聞き手に翻訳されて理解される場合に、言葉が必ずしも発せられた意味では理解されないことをフリールは指摘する。そこには、発話者からすると他者である聞き手の「解釈」が常に存在するからである。日常生活における意思の疎通や文化の伝達媒体としての「言葉」は、権力者によって事実を不透明にし、真実を隠すために使われがちである。フィッツ-サイモンが「…それ [『トランスレーションズ』] は言語についてであり——優位に立つ帝国主義的な勢力による破壊や、考えを伝える手段としての言葉に対する基本的な概念や言葉の性質についてである<sup>(27)</sup>」と評している。フリールは『トランスレーションズ』においてアイルランド語と英語にまつわる政治的、民族的な葛藤を描き、言語によるコミュニケーションについて総合的な考察を行っている。

フリールは、現実を認識する際に二つの言語にある基本的な差を提示しつつ、言葉の翻訳の難しさを例に挙げて、イギリス人とアイルランド人との意思疎通の難しさを示している。特に、題が“Translations”と複数形になっていることからしても、この作品がただの言葉の翻訳のことだけを取りあげているのではないことがわかる。“Translation”は、ひとつの言

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

語から他の言語への移し変えの意味が主であるが、思想を表現する際の他の言語の使用や解釈の問題をも含み、ひとつの場所から他の場所への移動の意味もある。そもそも語や語句は、意志を伝えるまとまった単位での言語の必須の要素である。しかし、同じ語や語句でも、それが発せられたときの歴史的な意味合い、社会状況、周囲の雰囲気や、声の調子や言い回しのニュアンスによって意味づけが大きく変わってくる。フリールが『トランスレーションズ』と表裏一体をなす作品だとしている『コミュニケーション・コード』で、彼はティムに次のように語らせている。

ティム：情報は共有されるべきだ。僕から君にメッセージは送られ、君はそのメッセージを受け取らなきゃならない。僕たちはどうやって、コミュニケーションを凶ると思う？…そうだよ。言葉。言語なんだよ。共有されたコード……社会的なあらゆる振る舞い、社会のあらゆる秩序は僕たちのコミュニケーションの構造、相互に合意され、相互に理解されうる言葉によるものなんだ。合意もなく、共有すべきコードがなかったら混沌とした状態になるだけだ。<sup>(28)</sup>

言葉の問題に関して、フリールは「名づける」ということが、アイデンティティの確立と不可分のものであり、言葉の「鍵」となっているとす。「言葉」のエッセンスを抽出し、作品を仕上げたイギリスの劇作家ハロルド・ピンターは、ひとは他者と距離を保つために言葉を用いるとし、「私たちに聞こえる言葉は聞こえない言葉があるという証しである。それは他者を近づけないための必要な回避であり、それは暴力的であるか、狡猾であるか、苦渋に満ちたものか、嘲りに満ちた偽装の発話である」と語る。またあるときには「言葉というのは、実際に話されていることの裏で別のことが話されてる」<sup>(30)</sup>とも語ったが、フリールと根本のところでは一致する考えである。フリールは、ある時点で日記に次のように書いている。

私は、アイルランドの小作人がイギリスの木工兵に抑圧される劇を書きたいのではない。私はアイルランド語の死滅に哀歌を書きたいのではない。場所に名前をつけるという劇を書きたいのではない…この劇は、言葉に関するものであり、言葉だけに関するものである<sup>(31)</sup>。

と、『トランスレーションズ』が「言葉」についてのみであるとフリールは強調するが、観客にはそう受け取れるであろうか。特に、アイルランドの人々にはイギリスとの関係においてこの問題を歴史的にも考えざるを得ない。また、それ以前には作品の内容が歴史的に正確ではないという批判に抗弁して、フリールは同じ日記に次のように記している。

私に(『トランスレーションズ』が)政治劇ではないという考えが沸き起こり、そうした考えで私はパニックに陥った。これは政治劇である？ どうしてそれを避けることなどできよう。もし政治的でないなら、それは何なのだろう。不正確な歴史か社会演劇なのだろうか？<sup>(32)</sup>

やはり政治プロパガンダの一義的な劇だと解釈されることを避けるために、コミュニケーションとしての言葉だけの問題ではなく、言葉とは切っても切れない文化や歴史背景の政治の問題を取り上げた点をフリールは強調している。彼がフィールド・デイ劇団を作った意図を考えれば政治色が濃いのは明らかであるし、結局は作品自体がフリールの意図や彼が提示する問題の本質を語っている。マックグラスも、この作品の政治的、社会的なメッセージの重要性を次のように述べている。

植民地主義という背景の中で、アイルランド語を語るときに政治とかわりなしでいられるとか、イギリスの支配によるアイルランドの文化の抑圧によって起こる問題が観客のすくなくとも一部に感情的な反応を生み出さないなどと信じるのは不正直である<sup>(33)</sup>。



アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

スターンリヒトも言葉によるコミュニケーションの失敗を描くことにより、『トランスレーションズ』は見事に成功していると、次のような賛辞をフリールに送っている。

植民地独立後の時代の一見解決不可能だと思える問題の情報を提示し、それに輪郭を与え、さらに明解することによって芸術の有効性をこの劇が証明している。これは偉大な業績であると同時に、演劇よって政治的な誤りの結果は個人の痛みや苦しみとなることを観客に示している。共同社会を惨事が襲ったときに悲劇を耐え忍ばなければならないのは結局は一般庶民なのである。<sup>(34)</sup>

スターンリヒトが語るように、政治的な判断の誤りの被害者は常にその政治にかかわりを持つことが許されなかった一般庶民なのである。また、スターンリヒトは『トランスレーションズ』は、「アイルランド政治演劇の中でもっとも重要な作品である<sup>(35)</sup>」としているし、マックグラスも同じく次のような認識である。

『トランスレーションズ』は、上演されると同時に古典作品となり、数多くの理由でフリールの全作品の中で中心的な位置を占めている。まずは、フリールの数多くの関心事や考えが詰まっている。彼の言葉に対する興味、さまざまな歴史的、文化的な話、国家主義者としての観点からのアイルランドの植民地化された歴史とそれ以後の歴史に対する興味、北アイルランドの社会的、政治的な混乱に対する関心が示<sup>(36)</sup>されている。

『トランスレーションズ』は、ふたつの相反する名前のつけ方においても、根本的な考え方やイデオロギー的な違いがイギリス人とアイルランド人との間にあることを浮き彫りにしている。アイルランド人の典型的な

「言葉」のとらえ方は、「言葉」というのは個人の内面を歴史的な脈絡の中で、さらにそこに神の存在や言葉の語源的な要素を取り入れて、個人の内面を表現する媒体だとするものである。言葉には歴史的で文化的な背景があり、それを無視しては、「言葉」はそもそもコミュニケーションの媒体とはなりえない。

言葉によってコミュニケーションが成り立つためには、言葉の持つ意味や定義が共通のコードとして前もって認識されている必要がある。この作品が訴えかけているのは、その共通基盤の欠落によるコミュニケーションの不能についてである。文化に関しても、私たちが何らかの意思疎通を日常生活では不都合なくしているということはあっても、同じ言語を使っている同一民族間においても完璧なコミュニケーションが必ずしもはかれているとは言えない。

現在のアイルランドとイギリスを併置して見てもわかることだが、共通の言語をもったとしても同じ国にはならないし、同じ文化圏になるわけでもない。ただ確かに言えることは、アイルランドの文化は英語が導入されていなかったとしたら、それは現在とは違ったものであったはずだということである。では、その違いとは何だろうか。

アイルランド人は英語を使わざるを得なくなってから、アイルランド国内で、アイルランド人自身が文化的に「異国の地」に追いやられてしまったのだろうか。イギリス人では、ジョン・ゴールズワージー、今世紀に入ってから V. S. ナイポール、ドリス・レスリング、ハロルド・ピンターがノーベル賞作家の榮譽に輝いているが、アイルランド人も英語を媒体として、W. B. イェイツが詩と演劇において、バーナード・ショーが演劇において、サミュエル・ベケットが演劇と小説において、シェーマス・ヒーニーが詩においてノーベル文学賞を受賞したことからしても、英語がいかに定着しているかがわかる。イギリスに全くひけをとらないし、人口比を考えるとその数はイギリスの10倍だとも言える。

このように英語が定着した感のあるアイルランドの現状を目にするなら、

アイルランド、アイルランド語、ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

長い歴史を通して自国の政治的独立のため、自国の文化や言語を守るために命を捧げた人たちは、いかなる心境に陥るのであろうか。

## 注

- (1) 初等教育課程においては10歳まで海外で生活していた生徒はアイルランド語の学習を免除される規定がある。
- (2) 中等教育課程においては、アイルランド語は「必修」科目であるにもかかわらず、Leaving Certificate Exam(卒業認定試験)で成績が悪くても卒業は認められている。厳しく必修科目として規定どおりに運用すると卒業できない生徒が多数出るため、アイルランド語を必修科目にすること自体の是非が問われる可能性があるための苦肉の策であり、アイルランド政府の苦悩がここに表れている。
- (3) George Steiner, *After Babel: Aspects of Language and Translation* (Oxford: Oxford University Press, 1998), p. 68.
- (4) Declan Kiberd, *Inventing Ireland* (London: Vintage, 1996), p. 616.
- (5) 1972年にデリーの市庁舎前で市民の平和的な行進に対して、イギリス兵が発砲して死傷者を出す事件があり、これを主題として、ブライアン・フリールは『都市の自由』(*Freedom of the City*, 1973)を書き上げた。
- (6) W. B. イェイツの詩劇『骨の夢』(*The Dreaming of the Bones*)は、この歴史的な事件を主題としている。
- (7) カトリック教徒は軍隊に入隊できず、議員になれないばかりか、法律職につけず、公務員にもなれなかった。アイルランド国内では教育はプロテスタント教会の管轄になっていて、カトリックの師弟はアイルランド以外では教育を受けることが許されていなかった。カトリックはプロテスタントから土地を購入することは法律で禁じられていて、カトリック教徒の男性の死後は、その土地は息子たちに分割されなければならなかった。ただし、長男がプロテスタントに改宗すれば、分割されるべき土地は独占できる権利を得た。プロテスタントの女性がカトリックの男性と結婚すると、女性の土地は没収され、女性の親族の男性のものとなった。この法律により、明らかにプロテスタントの政治支配、土地所有は拡大された。
- (8) Ulf Dantanus, *Brian Friel: The Growth of an Irish Dramatist* (Gothenburg: University of Gothenburg, 1985), p. 185.
- (9) W. A. ダンプルトン(桑原博昭訳), 『アイルランド：歴史と風土と文学』(京都：あぼろん社, 1990), p. 57.
- (10) アイルランド語を主要言語として話す地域、アイルランド自由国ができた初期の1926年にアイルランド復興の国民的な動きと連動して、アイルランド

語復活の核となる地区として政府により認定された。

- (11) 英語を媒体としてアイルランド語を教えている学校の生徒の多くは、アイルランド語を十分に習得していないのが現状であるのに対し、アイルランド語ですべての教育を行っている「ゲールスクール」の学校では、ゲールタハト地区の子供たちと同じように流暢にアイルランド語が話せるようになっている。
- (12) デリーをロンドンデリーという都市名にしてしまうことから、イギリスの帝国主義的な姿勢が伺える。
- (13) Tony Corbett, *Brian Friel: Decoding the Language of the Tribe* (Dublin: The Liffey Press, 2002), p. 20.
- (14) フリールが頻繁に用いる架空の地名で、アイルランドの田舎町の象徴となっている。
- (15) Michael Herity (ed.), *Ordnance Survey Letters Donegal*, (Dublin: Four Masters Press, 2000), p. xi.
- (16) このランシーに率いられた地勢調査隊のイギリスの木工兵たちは、1969年にアイルランドに送り込まれたイギリス兵士に対するフリールの批判にもなっている。
- (17) ランシーやヨーランドは地勢調査を実際に行った将校の名前で、フリールはこれを借用している。
- (18) アイルランド語を理解しないイギリス人の観客にも、もはや母国語を理解できないアイルランド人の観客のためにもこれは好都合である。しかし、日本で上演するとなると、もうひと工夫しないと混乱が生じて、観客には同一言語を話すイギリス人とアイルランド人との区別がつけにくいに違いない。
- (19) Brian Friel, *Translations* (London: Faber and Faber, 1981), p. 67.
- (20) *Ibid.*, p. 25.
- (21) *Ibid.*, p. 50.
- (22) *Ibid.*, p. 88.
- (23) *Ibid.*, p. 88.
- (24) *Ibid.*, p. 90.
- (25) George Steiner, *After Babel: Aspects of Language and Translation*, p. 21.
- (26) Elmer Andrews, *The Art of Brian Friel* (New York: St. Martin's Press, 1995), p. 169.
- (27) Christopher Fitz-Simon, *The Irish Theatre* (London: Thames and Hudson Ltd., 1983), p. 195.
- (28) Brian Friel, *The Communication Cord* (London: Faber and Faber, 1983), pp. 18-19.
- (29) Ronald Hayman, *British Theatre since 1955* (Oxford: Oxford University

アイルランド, アイルランド語, ブライアン・フリールの『トランスレーションズ』

Press, 1979), p. 8.

- (30) ブリストルで行われた第7回全国学生演劇祭でピンターが行ったスピーチの一部。Martin Esslin, *Pinter* (London: Eyre Methuen, 1977), p. 44.
- (31) Brian Friel, 'Extracts from a Sporadic Diary', in Tim Pat Coogan (ed.) *Ireland and the Arts*, (London: Quartet Books, 1982), p. 58.
- (32) Ulf Dantanus, *Brian Friel: The Growth of an Irish Dramatist*, p. 188.
- (33) F. C. McGrath, *Brian Friel's (Post) Colonial Drama* (New York: Syracuse University Press, 1999), p. 21.
- (34) Sanford Sternlicht, *Masterpieces of Modern British and Irish Drama* (London: Greenwood Press, 2005), pp. 89-90.
- (35) Sanford Sternlicht, *Masterpieces of Modern British and Irish Drama*, p. 88.
- (36) F. C. McGrath, *Brian Friel's (Post) Colonial Drama*, p. 177.